

「あれから40年」という名フレーズで、老化現象や中高年夫婦の確執をネタにした毒舌漫談で、絶大な人気を博す綾小路きみまろさん。

きみまろさんの毒舌ネタは、実に潔い。声を上げて笑うか、笑えないかのどちらかだ。ニヤリ、クスリという控えめな笑いはない。そして、笑えないネタでも、きみまろさんのトークにかかると大声で笑ってしまうのが不思議だ。しっかりとした人間観察に基づいた身近な出来事をユーモアで包んだネタには、安心感がある。「誰もが来るべき死を迎える日まで元気に笑って過ごしてほしい、それが私の願いです」と話すきみまろさんが、笑いと真摯に向き合ってきた芸能生活を語ってくれた。

文 山川敦司 撮影 村上兼久

# 人生、 笑いの数珠つなぎ

小雨交じりの東京・吉祥寺。待ち合わせ時間ちょうど、所属事務所の応接室に現れた綾小路きみまろさんは、トレードマークのカツラに下派手なジャケット姿。本誌の記事に目をやりながら、「ああ、この写真日劇ですよ、懐かしいなあ……。私はここでデビューして森（進一）さんの舞台で司会をやるようになったんですけどね。でも、心労で髪の毛が抜けちゃって今はカツラなんだけどもね。あつ、これ内緒だから書かないでね！」

と、のっけから、きみまろ節が炸裂。大爆笑のままインタビューがスタートした。

きみまろさんは1950年生まれ。キャバレーの司会を経て森進一さんや小林幸子さんの専属司会を務めたのち、中高年をネタにした毒舌漫談が人気を呼び、中高年のアイドルとなったことは、よく知られる話だ。ブレイクから10年以上を経ても、なお中高年の熱い支持はとどまることなく、

「今も年間公演数は100本くらい。それでも全盛期の130本に比べればずいぶん減らしているんですよ」というきみまろさんだが、現在も公演チケットは即売になるという人気ぶり。

「どうしてなんですかねえ……。やっぱり、中高年の笑える場所がないからなのでしょうかね。お笑い芸人はたくさんいますが、大半は若い人をターゲットにした笑い。それこそ、表参道」と、巣鴨の地蔵通り、とで分けられているみたいな感じで双方が交わるところがない。そこが問題ですよ」

きみまろさんは、鹿児島出身。子供の頃はいろいろを閉んで、家族だけが日常の風景だった。

「昔は茶の間で、みんなと同じ番組を観ていた。特に私の田舎なんかチャンネル数がないから、チャンネル争いもなかったしね。父や母と一緒に皆で演歌を聞いて育ちました。ところが、今は子供のころから自分の部屋があってテレビを観るのも別々だったり。それが世代間での格差や溝を作る原因なんじゃないかなえ」

故郷・鹿児島をあとにして、きみまろさんが上京したのは18歳の時。住み込みで新聞配達をしながら大学に通い、夜はキャバレーで司会のアルバイト。それが本業となり、森進一の専属司会者に抜擢されたのは29歳のころだった。

「ちょうど森さんが渡辺プロから独立したころ。『新宿港町』が爆発的にヒットして第2の黄金時代が幕を開ける頃ですね」



キャプションキャプションキャプション  
ンキャプションキャプションキャプ

# 漫談家 綾小路きみまろさん







Profile  
あやのこうじきみまる ● 落語協会会員。1950年鹿児島生まれ。2003年第17回日本ゴールドディスク大賞「企画・アルバム・オブ・ザ・イヤー賞」を皮切りに、2004年第41回ゴールデン・アロー賞「話題賞」、2005年第47回 輝く！日本レコード大賞「企画賞」、2009年日本ゴールドディスク大賞「特別賞」など受賞多数。デビュー35周年となる2008年に、CD売上げがトータル350万枚を突破。

きみまるさんは、森進一の専属司会を10年務めたが、

「司会者の仕事は森さんの足跡をナレーションで語ったり、インタビューで各コーナーを繋いだりすること。でも、しゃべりには自信があったし、つい自分の色を出したくなって、しゃべり過ぎてしまい、森さんから注意されたこともあったなあ。もともとお客さんは森さんを観に来ているわけですから、見事にウケま

せてくれたねえ（笑）」  
森さんから小林幸子さんの専属司会者を経て、五代夏子さんのショーでは漫談コーナーを務めることになった。

「時代はちょうど漫才ブームの頃。（ビート）たけしさんと一緒にキャバレーに出ていた芸人たちが、ブーム

間に同じことを話しますが、私は同じ時間に同じことができないうタイプ。だから面白くかみ合う時であれば、かみ合わない時もある」とか。  
そのきみまるさんをノセるのは、客席の笑い。客にノセられると自身のタイムミングもよくなる、というきみまるさんだが、現在でも、その日の公演を録音し分析と検証を怠らない。

「夜、ホテルに帰って録音した音源を聞いて、今日はここが悪かった、とチェックします。それから、ウケなかつたネタを省いて残ったものを数珠つなぎにしていくんですが、せっかくチェックしたのに、なかなかその反省が生かせない（笑）。ほんと、その繰り返しです。舞台は人生そのものなんですわえ」

### 寿命つきるまで 笑いを届けたい

きみまるさんのもとには、時々ユニークなファンレターが届く。  
「あなたのテープを聞いて、おじいちゃんのお母さんが伸びましたとか、笑ったことのないお母さんが笑うようになったとかね。この間は、亡くなった母の棺の中にあなたのテー

にのって売れっ子になっていく姿を見ると悔しくてね。俺はいつまでこのままでいるんだろう、と、テレビのスイッチを切っちゃったこともありましたね」

きみまるさんにとって、まさに自問自答の日々だったという。

### 五十にして、惑わず そして天命を知った人生

きみまるさんが、一発逆転の賭けに出たのは52歳の時だ。

「結構ウケてはいたんです。周りからも、面白いのになんで売れないんだろかね」と言われ、自分自身も品がないんじゃないか、オーラがないんじゃないか、と考える毎日。でも、その一方で聞いてもらえれば絶



芸能生活35周年とCD売上げがトータル350万枚を突破したことを祝った額。2008年にテイチクエンタテインメントから贈呈。

プを入れました、葬儀の時にあなたのテープをかけて大笑いしながら送りましたなんていう手紙もあって、

「自分のライブ音源がよもや棺の中に納められているとは、ご本人も驚くばかりだが、現在、きみまるさんが発売する『爆笑スーパーライブ』（全6枚）は累計で520万枚を突破。オリコンチャートでもロングセラーとして燦然と輝いている。

ところで、肉体的な年齢を感じるようになったというご本人は「老いていくこと」をどう捉えているのだろうか。

「身近なことですが、昔来ていたタキシードのサイズが徐々に小さくなってきているのも老いてきた証拠。歳を取ると体は小さくなるんですからね。だから中高年にダイエットなんか必要ないんですよ。それで、もっと小さくなって棺桶に入りやすくなる」

対わかってくれるはず、という気持ち

「そこで自主制作したカセットテープを高速道路のパーキングで観光バスのガイドに無料で配ることを思いつき、テープデッキを5台使って徹夜でテープをダビング。」

「テープには、連絡先と『退屈したら聞いてください』と一文を添えました。周りからは、何やってんだ！金をドブに捨てるようなものじゃないか」と言われたけど、わかってくれた人がいることを信じていたし、これでダメなら仕方がないという気持ちもあつた。先が見えないからこそ、できたのかもしれないからこそ、配ったテープが3000本を超えたところから、5本、10本と家の電話が鳴り始め、あれよあれよという間に、1日で数百本の注文が入るようになった。きみまるさんの名は、口コミで広がり、2002年に発売した『爆笑スーパーライブ第一集』は160万枚を超えるミリオンヒットを記録。その後は舞台やテレビで大活躍。

そんなきみまるさんだが、今もなおステージこだわり続ける。その理由は何なのだろうか？  
「私は、テレビではなくステージで活躍。」

——相変わらずのきみまる節。しかし、なるほど、人間がスリム化していくのは、まさに自然の摂理ということか。

「私の漫談は、前半ドカンと盛り上げて後半は、でもあなたはいずれ死ぬんですよ、だからこそ今日一日元気で頑張ろうね」と繋いでいく。すると、客席では、そうなんだよねと思いつつ笑ってくださるから。思いつきり笑ってくださるから気持ちがあつたりして、ステージが終われば、皆さん、私が言ったことなんて全部忘れちゃう。余韻も何もない。しゃべった私も全部忘れちゃう（笑）。それでいいんですよ」

人生は一期一会。だからこそ、我を忘れて腹の底から笑ってもらいたい——それが、きみまるさんの変わらぬ思いだ。

「お客さんに喜んでもらうには、お客さん以上に精神的にも肉体的にも元気でいなくちゃいけない。そのためには頑張りすぎないことを心掛けています」

超高齢社会を迎え認知症防止にもますます笑いが必要になることは間違いない。  
「今100歳以上の人は6万人以上、これからもどんどん増えると思いま

育った人間ですから、舞台に立つことがライフワーク。テレビで育った人たちはテレビが舞台ですが、番組終了と同時に仕事がなくなるかもしれないし、飽きられるかもしれない。私の場合は、お客様が待っていてくださっている間は仕事がある。幸せなことですよ」

ステージでは1時間以上、立ちっぱなし、歩きっぱなし。そして笑わせっぱなし。

「60歳を過ぎたあたりから、体がキツイと感じることはあります。普通漫談はだいたい40分で、師匠と呼ばれる方たちも弟子が10分やったら、自分は30分かね。でも、私は前座を使っていないので、最初から最後まで1時間以上ひとりしゃべり続けます。調子の悪いときもあります。お客様はチケットを買ってきてくださっている方々。私は笑わせたいといけない。今まで、風邪などで体調を壊しても仕事を休んだことはありません」

コンサートやライブでは、お客さんの反応を見ながらネタを変えていく芸人さんも多いと聞くが、  
「私のステージでは、私の調子でネタを変えます。だから、話がどこへ飛ぶかわからない。落語家は同じ時

す。同時に、認知症や寝たきりになるケースも増えています。そんなとき、もし、心臓にスイッチがついていたらもう押しでもいいかな」と思うような人もいます。そう考えると、健康は命より大事だということ。ほどほどという言葉があります。私自身、どこまでが命のほどなのかはわかりません。ただ、寿に命と聞いて寿命。生きていくことは尊いことですから、私も生きられるところまで私も生きて、やれるところまで頑張っていきたい。それが寿命だと思っています」

ご本人いわく「潜伏期間30年」、そしてブレイクして14年。その言葉には生真面目で実直な芸人根性が現れていた。

Information  
**綾小路きみまる**  
**「あれから40年! 爆笑!! 傑作集!!!」**  
**DVD**  
テイチクエンタテインメントより好評発売中!  
中高年だけじゃない! 世の中を元気にする決定盤!